

## ツングース諸語における「使役」を示す形式について

風間伸次郎  
(東京外国語大学)

### 0. はじめに

Ikegami (1974)によれば、ツングース諸語は主として音韻対応の面から以下の4つのグループに分けられる。

(I群) エウエン語、エウエンキー語、ソロン語、ネギダル語

(II群) ウデヘ語、オロチ語

(III群) ナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語

(IV群) 満州語、シベ語

本論文ではこれらのうち筆者が十分な資料を持っているウイльта語及びナーナイ語について詳しく考察し、しかるのちにウルチャ語、エウエン語、満州語、シベ語にも触れる。

結論としては、これまで単に使役(もしくは使役・受身)とされてきた形式に、「再帰的非意図的」な用法や「主語不転換」というべき用法があることを指摘する。またこれらの用法を通言語的に考察し、「使役」とは何か、ということを再考する。

### 1. ウイльта語

#### 1.0. 先行研究

ウイльта語における問題の接尾辞-BOON-は、同化や脱落による種々の異形態を持ち、語幹と融合しうる(詳しくはIkegami (1973)を参照、概略を述べると、動詞語幹末音節の子音をcとするならば、-BOON-は-*poon-*、-*boon-*、-*woon-*、-*peen-*、-*been-*、-*wéen-*、-*Coon-*、-*Ceen-*、-*Caun-*、-*Cəun-*、-*Coun-*などの形で現れる)。

Tsumagari (1985)は-BOON-について、使役にも受身にも用いられるとし、受身の場合動作主は与格をとり、使役の場合には対格をとる、として、次のような例をあげている(なおč=tʃ, ʃ=dʒ, ŋ=jであり、下線    は融合を示す)。

(1)bii čaa nari-du paač-čooč-čim-bi.

私はその人に(与格)叩かれた(叩く-BOON-完了-1sg.主(一人称単数主語、以下も))

(2)bii čaa narree ŋən-nəuč-čim-bi.

私はその人を(対格)行かせた(行く-BOON-完了-1sg.主)

また(2)の文の訳を"I let/made him go."とし、この形式が強制から放任までの広い意味を示すとみている。Ikegami (1973)は-BOON-を単に使役・受身の接尾辞としている。

Petrova (1967)は、強制、許可の意味を動詞語幹に加える接辞であるとしており、受身の意味をみとめていない。

#### 1.1. 使役と受身

池上(1997)には、-BOON-のついた動詞形が68例見出されるが、うち49例には使役の訳語があてられている。他には他動詞化といえるものが7例ある(例えばdak-saun-「貼

る」<daksa-「貼りつく」)。

他方gal-**loon-**「嫌われる」(<galu-「嫌う」)とluk-**paun-**「刺される」(<lukpa-「刺す」)、及びum-**moo-či-**「何回も飲まされる(これは正確には使役受身、-čiは継続反復相)」の3語では受身の訳のみである。したがって動詞語幹の意味が、使役か受身かの意味の決定に関わっていると考えられるが、さらにwaa-**woon-**「殺される、殺させる」とit-**təun-**「見せる、見られる」では使役と受身の両方の訳があがっている。

池上(1984)のテキスト中には-BOON-の用例は62例見出され、うち46例は使役であるが、他方受身が4例ある(訳も原文のまま)。

- (3)uttəə niirrəə iiwu-xə-ni. ga duxu dookčee-duu-ni dapaa-ti taani.  
戸口を開けるとすぐ入れた さて 家中のほうから誰かが つかんだ そうな。  
dap-**pau-**mii puttə-t eeččeeččee očči-ni taani. soŋo-xo-ni.  
つかまれて (-miiは副動詞) 子供は オギャーっと いった そうな。それが泣いた  
(池上 1984 p.10)

- (4)ačiga əni-nii udala əni-ni toogo-ni ulissəə-nii doromo-mjikəə  
ねずみの 母親は カエルの 母親の 大鹿の 肉を 盗んでいて  
səəri-bi činguram paačil-**lauč-**či-nii karr karr  
自分の背骨を折るほどに 叩かれて (-čiは完了、-niiは3sg.主) カルル カルル  
(池上 1984 p.87)

上述の先行研究(Tsumagari 1985)の例文(1)では受身文で与格の動作主が現れていたが、(3)、(4)の2例とも動作主は現れていない。したがって与格の動作主の存在は-BOON-が受身に解釈されるための必須の条件ではない。

## 1.2. 再帰的非意図的用法

さらに使役とも受身ともみなすことのできない興味深い-BOON-の例を見出すことができる。池上(1997)のluk-**paun-**「刺される」(<lukpa-「刺す」)、taa-**woon-**「ひっかける」(<taa-「ひっかかる」)には以下のような例文があがっている(訳も原文のまま)。

- (5)ŋaala-bi kitaan-ji goči luk-**pauč-**či-ni. (池上 1997 p.114)  
私の手に 針が また 刺さった (-čiは完了、-niは3sg.主)

- (6)xaunee kitaan-ji goči luk-**paun-**ji-wi. (池上 1997 p.114)  
うるさいねー、針が また 私に刺さる(じゃないの、しずかにしてよ)  
(jiは不完了、-wiは1sg.主)

- (7)ugdaa taa-**wooč-**čim-bi. (池上 1997 p.197)  
舟を おれはひっかけた(浅いところへ行つてひっかかった)  
(-čimは完了、-biは1sg.主)

- (8)tari nari ločokkoo taa-**wooč-**či-ni. (池上 1997 p.197)  
その 人は 釣り針を ひっかけた(魚を釣っているうちに木にひっかかった)



-WAAN-の例は、風間 (1991) に 11 例、風間 (1993) に 66 例、風間 (1995) に 19 例、風間 (1996) に 47 例、風間 (1997) に 34 例、風間 (1998) に 63 例、風間 (2000) に 99 例、風間 (2001) に 107 例、合計 446 例見出すことができた。

そのうち全体の約 4 分の 3 は使役である。使役の中での Causer の関与の度合いはさまざまで、「強制」から「許可」まで広い意味を示す。

しかしこの一方で使役としての解釈が難しく、やはり受身と考えるべき例がある (=は附属語境界を示す)。

- (12)gañi xoso-waan-daa pulsi-mi  
 魔物に 追いかけてられて(??追いかけて、-daa は副動詞) 逃げ回るうちに  
 gañi=nda osi-ori bi-jəə=mə, (風間 1998 p.38)  
 魔物に なってしまう かもしれません、

両方の解釈が可能であると思われる例もある。

- (13)mii əile~ əmuučən balji-mi,  
 私は これまで 一人で 生活してきて  
 xamačaa sora-wa sia-waan-dači, (風間 1993 p.52)  
 いかなる ノミにも 食われなかった/食わせなかった (-dačiは否定過去)、

- (14)buə=təñii ami-si bur-buwəən-dəə~ (風間 1998 p.95)  
 私たちは (我らの主人だった) おまえの父に 死なれてしまって (-dəəは副動詞)、  
 /おまえの父を 死なせてしまって、

なおこの言語では Causee (もとの文の動作主) に与格の名詞項が現われる例はない。他動詞文から使役文を作る時には、Causee は対格をとり、二重対格の文となる。

## 2.2. 再帰的非意図的の用法

さらにウイльта語で「再帰的非意図的」と呼んだ例と同様のものがナーナイ語でも見出される。

- (15)moo-wa tami nasal-či-ji toiko-waan-kim-bi, (風間 1998 p.78)  
 薪を 扱っていて 目へ 当ててしまったのよ (-kim は完了、-bi は 1sg.主)

- (16)əi əsi=mət xai-mi tuu-wəən-dii-ni, (風間 1997 p.95)  
 これは 今 どうして 倒れてしまったんだ (-diiは不完了、-niは 3sg.主)、

- (17)ərdəŋgə xai-mi tui aa-waan-ki-ni,  
 不思議だ、どうして こうも (長く) 寝てしまったのか (-kiは完了、-niは 3 sg.)、  
 ii, inə-dələ=dəə. (風間 1995 p.46)  
 そう、夜が明けるまでも。

## 2.3. 主語不転換の用法

ウイльта語でみたような、主語不転換をその主たる機能としていると考えられる例が

ナーナイ語でも見出される。

(18)ə~ŋ xujun ŋəwən pondajoo-wa-ni, waa-waan-daa,  
「(私の息子は)九匹の 魔物の 妹を、(間違っ)殺してしまったので(-daaは副動詞)、  
aksian boačaan-či-a-ni iraca-ka-ja,”  
(彼らの復習を逃れるために私が) アクシアン 島へ 連れていったのよ、」  
(風間 1993 p.216)

(19)ə~ŋ əsi=tənii pondajoo-ji tui um-buwəən-dəə  
今 末の妹が そう 言ったので (-dəəは副動詞)  
/末の妹に そう 言われて  
xamasi močogo-raa undiisi pərgə-xə-ni. (風間 1997 p.124)  
後ろへ 戻って 試してみた

(長兄は上の妹たちの集めてきたベリーを食べてみたが、おいしくないなのでその場を立ち去ろうとしたが、一番末の妹が「私の集めたベリーをだけはなぜ食べてみないのか、」と問うたその場面で。なおこの(19)では日本語で受身の訳も可能である、これは日本語における受身形の主語不転換の用法(後述)とみることができる)

以下の例は筆者が作例し、ナーナイ語母語話者のコンサルタント(1942年、ナイヒン村生まれ)によって全く問題のないナーナイ語の文として認められたものである。(20a)は複文で、従属節に-WAAN-が用いられている。(20b)と(20c)は(20a)を二つの単文に分けたものだが、(20c)の最初の単文には-WAAN-を用いているのに対し、(20b)には-WAAN-がない。コンサルタントによれば、(20a)と(20b)が同じ意味を示すのに対し、(20c)は異なった意味を示す。すなわち、主文で-WAAN-が用いられた(20c)では、-WAAN-は普通に使役の意味を示すのに対し、従属節で用いられた(20a)では使役の意味を失っているのである。

(20a)amim-bi bur-buwəən-dəə, ŋoani əmučkəən balji-i-ni.  
父親が 死んで、 彼は 一人きりで 暮らしている  
(-WAAN-を使役の意味で解釈すれば、「父を死なせて彼は一人きりで暮らしている」となるが、そのような意味には解釈されない)

(20b)ami-ni bui-ki-ni. ŋoani əmučkəən balji-i-ni.  
父親が 死んだ。 彼は 一人きりで 暮らしている

(20c)amim-bi bur-buwəən-ki-ni. ŋoani əmučkəən balji-i-ni.  
父親を 死なせた/殺した。 彼は 一人きりで 暮らしている

同様に、コンサルタントによれば、以下の(21a)と(21b)は同じ意味であるが、(21c)は異なるという。

(21a)tugdə(-wə) tugdə-wəən-dəə, mii čakpa-xam-bi.  
雨が 降って、 私は 濡れてしまった  
(-WAAN-を使役の意味で解釈すれば、「雨を降らせて私は濡れてしまった」となるが、

そのような意味には解釈されない)

(21b) tugdə tugdə-xə-ni. mii čakpa-xam-bi.  
雨が 降った。 私は 濡れてしまった

(21c) tugdə(-wə) tugdə-wəən-kim-bi. mii čakpa-xam-bi.  
雨を 降らせた。 私は 濡れてしまった

### 3. 他のツングース諸語における「使役」形式

#### 3.1. ウルチャ語

ウルチャ語における「使役」の接辞は-wan-/wən- (末尾の要素 "n" は鼻音の前で脱落する) である。Petrova (1936) はこの接辞を、たんに語幹に「強制」の意を加えるものとし、Sunik (1985) は「許可、強制」の意を加えるものとしている。共に他の用法についての言及はない。しかし以下の用例は主語不転換の用法とみなすことができる。なお再帰的非意図的用法の確実な例は今のところ得られていない。

(22)ti luktju-wa-mi gəsə gəsə juəl jaŋgi agbun-či-ti. (Sunik 1985 p.94)  
その 穴を掘ると すぐに 二人の 長が 現れた

(23)ada-wa-mi, ti duusəŋ=gdəl ti mapa xoldoŋ-ki-ni ugda doo-ti-ni uu-xan.  
着岸すると、その トラは その じいさんの 横を 通って 舟の 中へ 乗り込んだ  
(Sunik 1985 p.99)

#### 3.2. エウエン語

Novikova (1980) によればエウエン語の使役形 (-wkan-/ukan-など) は、論理的主語 (行為者) を与格で示し、受身的な意味も示しうる、としている。なおこの言語にはこれとは別に受動形 (-w-/u-/m-) があるが、そこでも同様に論理的主語 (行為者) は与格で示される。

(24)olri-ŋ-ur æædu ŋin-du jəb-ukən-is.  
魚を どうして 犬に 食べられてしまったんだ/食べさせてしまったんだ

(25)bii nakit-tu hinu maa-wkan-im.  
私はクマに おまえを 殺されてしまった/殺させてしまった

#### 3.3. 満州語とシベ語

満州語の-bu-について河内 (1996) は、使役の意も受身の意も表すとし、使役では動作主を対格で、受身では与位格でとることが多いとしている。Zakharov (1879) など他の記述も同様である。しかし久保 (1986) によれば、他動詞使役文では両方の格の例があり、格だけではその意味を区別できないことが指摘されている。

上原 (1960) によれば、満州実録における受身の意の例は 72 例あるが、次の 9 つの動詞に限られるという (saiša-「賞賛する」、buye-「愛する」、dali-「遮る」、eime-「嫌う」、gai-「取る」、jafa-「手に取る、つかむ」、takūra-「人を派遣する」、gida-「敗る」、wa-「殺す」)。他方満州実録に使役の-bu-は 107 の動詞についてその例があるそうであり、受身の

意になった動詞の意味にはある種の偏りがある。しかし上記のうち jafa-, gida-は使役の例にもあがっているので、もっぱら動詞語幹の意味が使役/受身の別を決定しているわけではない。

シベ語について、承志氏（1968年 チャプチャル村生まれ）より使役・受身形-*və* etc.に再帰的非意図的用法とみなせる例を確認したが、主語不転換については、はっきりとした例を得ることができなかった。

(26)min galəf unoda čoksa-və-maq səndağəi.  
私の 手を 針に 刺して (-maqは副動詞) しまった

#### 4. 通言語学的考察

このように「使役」の形式が示すさまざまな用法は、決してツングース諸語に限られているわけではない。ここでは他の言語との対照を通じて、こうしたさまざまな用法が成立する理由について考える。その結論として、一見バラバラに見えるこれらの用法が、実は意味的にはつながりを持ち、連続しているものであることを示したい。

##### 4.1. 使役と受身

まず日本語であれば使役の形式と受身の形式はいかなる基準で使い分けられているか、ということを考えてみよう。するとその両者の境界は、寺村（1982）が指摘しているように、決して分明ではなく、むしろ連続したものであることに気づく。すなわちその使い分けの基準は、問題の事態が主体にふりかかってきたと感じるか（間接受身）、その事態の発生に「責任」を感じるか（使役）にあり、それはすなわち主体の関わり方の強弱の違いである（参考例「息子に戦争で死なれた」「息子を戦争で死なせた」）。ウイリタ語やナーナイ語では一つの形式が使役も受身も意味し得るのであるから、その形式の意味範囲は、この意味的に連続する両者にまたがって広がっていると考えることができる。

そして、使役と受身が同じ一つの形式で示されることはツングース諸語に限ったことではない。

鷲尾・三原（1997）はやはり使役と受身に関して両義的な、英語の have 構文や、フランス語の faire 構文、韓国語の-i/-hi/-ri/-ki/etc.による構文、モンゴル語の-uul による構文に関して、「関与」と「排除」という区別をたて、関与の状況(27a)では両方の解釈が可能だが、排除の状況(27b)では使役の解釈しか許されない、としている。

(27a)I had my house burgled last night.

(27b)I had his house burgled last night.

ここでいう「関与の状況」、とは、別の見方からみれば、行為の対象が主体にとって譲渡不可能なものであるといえるのではないだろうか。すなわち行為の対象が主体の体の部分や、衣服、道具、家、乗っている乗り物、親族、などであれば、その行為の結果は当然主体自体にも影響を及ぼすことになる。つまりその行為はある意味で再帰的なものになるわけで、その点から受身の意味が生じてくるものと考えられる。さらにこの点において、使役、及び受身の用法は次にみる再帰的非意図的な用法へと意味的に連続していると考えたい。

この意味的な連続を日本語にみるならば、次のような例を考えることができるだろう。

(28a)彼は弟に友達を叩かせた

[強制的使役]

(28b)彼は弟に自分の肩を叩かせた

[強制的かつ再帰的な使役]

- (28c)彼はみすみす相手にまえみつを取らせてしまった [非意図的かつ再帰的な使役]  
 (28d)彼は自分の腕を叩かれた [持ち主の受身]  
 (28e)彼はうっかり自分の指を叩いた [非意図的かつ再帰的な行為]

#### 4.2. 再帰的非意図的の用法

ツングース諸語以外の言語にも、「使役」の形式が再帰的非意図的な用法を示す言語がある。

川口 (1999) ではトルコ語の使役形式-dir について次のような例をあげている。

- (29) Saltanat gemisi kaptansız kalırsa  
 スルタンの 船は 船長なしとなれば  
 çok geçmeden bin-dir-ir kayalıklara,  
 たいして 時が経たないうちに 乗り上げてしまう、岩礁に

- (30) Vasfiye Teyze yüz-ü-nü kız-dir-di.  
 ヴァスフィエ おばさんは 顔を ほてらせた

日本語の古文にも、やはり使役が非意図的な行為を示すのに用いられる例がある。

長谷川 (1969) は日本語の古文における「馬の腹射させて」、「風に吹きならさせて」、「心惑わし」、「涙落し」などの例について、「す」「さす」及び他動詞のあるものに自発的用法があるとし、これを「随順」と呼んでいる。より詳しくは、「随順の特徴は・・・力の関与が、そこに用いられた動詞の動作主体の意図にはかかわらない、ということである」と述べ、さらに現代語の「車をぶつけた」、「子供を死なせた」も同様の例であるとしている。たしかに現代語でも「足の骨が折れた」は非意図的なことであるのに「足の骨を折った」とも言うし、「おなかをこわした」では「おなかをこわれた」とは言えないなどの事実がある。長谷川 (1969) にはっきりとした指摘はないが、こうした非意図的な用法はやはり再帰的な行為の場合、すなわち行為の対象が体の部分や、(主体と一体化した) 乗り物など、より譲渡不可能なものである場合に起こるようだ。

早津 (1991) は日本語でのこうした再帰的な使役 (早津 (1991) では所有者主語の使役とよんでいる) の構文について次のように述べている。その一部を引用する。

所有者主語の使役のもっとも代表的な用法は、「男の子は目を輝かせて話を聞いていた。」のように複文の従属節述語として用いられるものであり、(中略) 「男の子は目を輝かせて話を聞いていた」は、「男の子は話を聞いていた。そのとき男の子の目は輝いていた。」とでも表わしうる事態であるが、それを基本動詞「輝く」を用いて一文で叙述しようとする、「男の子は目が輝いて話を聞いていた」のようになりに不自然な表現となってしまう。

すなわち、体の部分などについて何かを言う場合、その前後の文もしくは節では、その持ち主に関して、つまりその持ち主を主語として何かが述べられていることが多いに違いない。したがってそこで体の部分などを主語にすると、主語を転換せざるを得なくなり、不自然さが生ずるものと考えられる。ゆえにこうした再帰的な使役は主語不転換ということとも深い関わりを持っていると考えられる。

#### 4.3. 主語不転換の用法

ツングース諸語以外の言語にも、「使役」の形式が、特に従属節中においてその使役の意味を失い、もっぱら同じ主語を維持するためだけに機能する例が見出される。



服部 (1944) ではギリヤーク語の使役形について次のように述べている。

従属節の動詞には使役動詞の説述形が用いられるものがあり、この場合語尾は従属節の主語にではなく主節の主語に対応する。

(i) ni: jaŋ ʔp̄ruŋ-ku-t ʔjindunt.

私は その人が 来たのを 見た

(ii) jaŋ ni: ʔp̄ruŋ-ku-r ʔnindunt.

その人は 私が 来たのを 見た

ni: jaŋax ʔp̄ruŋ-ku-nt は「私はその人を来させた」、  
jaŋ ni:ax ʔp̄ruŋ-ku-nt は「その人を私は来させた」であって使役の意義を持つが、  
haFu ʔke: jaŋax ʔp̄ruŋ-ku-nt は「そうする中にその人を来させた」ではなく、「  
そうする中にその人が来てしまった」であり、  
tʃax ʔjinin-ku-nomu misn win ʔda: は「おまえに食べさせてから我々はこちら  
」ではなく、「おまえが食べてから我々はこちら」の意であってギリヤークは  
これらの叙述に対してなんら使役動詞としての意義を感じていない。同様のこ  
とが例(i)及び(ii)の叙述について言われる。

なおこの言語の受身形は、使役接尾辞-ku-によって派生した動詞形の前に再帰的な要素  
p-「自己、自身」をつけることによるという (服部 1988)。

(31) ix-ku-nt / p-ix-ku-nt  
殺させる 自身を殺させる (=殺される)

先にみたように、使役と再帰の複合した事態は、受身と意味的に連続している。この  
言語はそのことを形式の上でも示している例として、興味深い。

エスキモー語ユピック方言にもやはり使役形式による主語不転換の用法がある。

(32) tangraa qia-vkar-luku. (宮岡 1988)

見る-直説法・3sg.主・3sg.目 泣く-使役-従属節表示  
彼は彼女が泣いているのを見た

日本語や英語の受身や、オーストラリア原住民語 (ワルング語やジバル語) の逆受  
動など、態の諸形式が主語を転換させないために用いられていることについてはすでに  
いくつかの指摘がある。英語及びオーストラリア原住民語については角田 (1988) を参  
照されたい。ここでは野田 (1991) より日本語の例をあげておく。

(33a) 社長が課長を呼んで、課長は今社長室に行っています

(33b) 課長は社長に呼ばれて、今社長室に行っています

受身を用いた(33b)の方が自然な日本語に感じられる。その理由は受身によって主節と  
従属節の主語がともに「課長」に統一され、これを「は」によって主題化することがで  
きるからであると考えられる。

このように受身や逆受動が主語不転換の機能を持つのであるから、やはり態のカテゴ  
リーに属する使役がこうした機能で用いられても何ら不思議はない。

「態 (voice)」の定義の問題になるが、そもそも態の転換とは名詞項の増減や格の交替、  
とりわけ主語となる名詞の交替であって、態の形式が節間での同主語の維持に働くのは  
もっともなことだと考えられる。

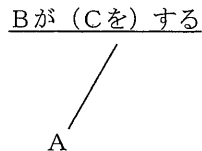
## 5. 結論

日本語のような言語では、例えば「Bが(Cを)～する」という事態(「事態P」と呼ぶことにする)に別の人物Aが関わっている場合、事態Pと関与者Aの関係に応じて、以下のようにさまざまな表現をとる。

<u>Bが(Cを)する</u>	<u>Bが(Cを)する</u>	<u>Bが(Cを)する</u>	<u>Bが(Cを)する</u>
↑ 強制/指示/許可 などの原因 A	↑ 過失責任 A	↓ 被害 A	↑ 非意図的 ↓ 結果 A
[使役文] AがBを/にさせる [弟を行かせる]	[使役文] AがBを/にさせる [息子を死なせる]	[受身文] AがBにされる [兄に叩かれる]	[無意志文] Bがする/AがBをする [手に針が刺さる /私は手に針を刺す]

しかしツングース諸語のうちウイльта語やナーナイ語では、これらの内容はどれも同じ動詞接尾辞によって示されることがわかった。つまりこれまで単に「使役」とみなされてきたこの接尾辞はもっとずっと広い意味範囲をカバーしていることがわかった。さらに従属節で用いられた場合、関与者Aと事態Pが関連づけられるはするものの、「原因」や「被害」などの具体的な意味関係が全くない場合さえあった(本論文ではこれを「主語不転換」の用法とした)。

そこで本論文では、このようなツングース諸語の接尾辞それ自体の機能は、『事態Pと関与者Aを結び付け、関与者Aを主語とした構文を作る、』ということだけであると考えたい。すなわち上のような図を用いれば次のようになる。



そして「使役」や「受身」などの具体的意味は、以下のような条件によって決まってくるものと考えられる。

- [1]問題の接尾辞が従属節中に用いられているか否か
- [2]問題の接尾辞がつく動詞語幹の意味がどのようなものであるか
- [3]関与者(A)と行為者(B)と行為の対象(C)の三者の関係はどのようなものであるか、特にAにとってCが譲渡不可能的なものであるか否か

これまでの研究では「使役」、「受身」などの概念を示す形式がアプリアリにどんな言語にも存在すると考えてきた面があると思う。言い換えればこうした区別を持つ言語の既存の文法記述の枠組みに囚われてきたのである。言語が表現すべき現実世界は連続したものであり、ある言語の言語形式がそのどこからどこまでを切り取って意味範囲としているか、予想できるものではない。「使役」や「受身」という用語はその統語的プロセスに比してあまりに意味的に命名された術語であると思う。未知の言語のある言語形式

もしくは構文を記述する際には、これらの術語をいったん離れて、まずその統語的な振る舞いをよく見きわめ、一定以上の量の用例から全体像を把握した上で、より客観的にその機能を考えていく必要があると考える。

#### 参考文献

- 池上二良 1984 『ウイльта口頭文芸原文集』 北海道教育委員会。  
\_\_\_\_\_ 1997 『ウイльта語辞典』 北海道大学図書刊行会。  
池上二良・津曲敏郎 1990 『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」(3)』  
北海道教育委員会。  
上原久 1960 『満文 満州実録の研究』 不昧堂書店, 東京。  
風間伸次郎 1991 「ナーナイ語テキスト」『ツングース言語文化論集 1』黒田・津曲編,  
北海道大学文学部。  
\_\_\_\_\_ 1993 『ナーナイ語テキスト』ツングース言語文化論集 4,  
小樽商科大学言語センター  
\_\_\_\_\_ 1995 『ナーナイの民話と伝説』ツングース言語文化論集 5,  
小樽商科大学言語センター  
\_\_\_\_\_ 1996 『ナーナイの民話と伝説 2』ツングース言語文化論集 8,  
鳥取大学教育学部  
\_\_\_\_\_ 1997 『ナーナイの民話と伝説 3』ツングース言語文化論集 10,  
東京外国語大学  
\_\_\_\_\_ 1998 『ナーナイの民話と伝説 4』ツングース言語文化論集 12, 千葉大学。  
\_\_\_\_\_ 2000 『ナーナイの民話と伝説 5』ツングース言語文化論集 14,  
東京外国語大学  
\_\_\_\_\_ 2001 『ナーナイの民話と伝説 6』ツングース言語文化論集 15,  
文部省科学研究費補助金「特定領域研究 (A)『環北太平洋の「消滅に瀕した言語」  
にかんする緊急調査研究』」成果報告書 A2-005。  
川口裕司 1999 「現代トルコ語の使役構文 - その意味と機能 -」, 『言語研究IX』  
東京外国語大学。  
河内良弘 1996 『満州語文語文典』 京都大学学術出版会, 京都。  
久保智之 1986 「満州語文語の使役・受動構文についての一考察」  
『九大言語学研究室報告』第7号。  
角田太作 1988 「オーストラリア原住民語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編  
『言語学大辞典』第1巻 東京 三省堂。  
寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版。  
野田尚史 1991 『はじめての人の日本語文法』 くろしお出版。  
服部健 1944 『ギリヤーク』 東亜民族要誌資料第一号 帝国学士院東亜諸民族調査室。  
\_\_\_\_\_ 1988 「ギリヤーク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』  
第1巻 東京 三省堂。  
長谷川清喜 1969 「使役の助動詞す・さす (古典語)」松村明編,  
『古典語現代語助詞助動詞詳説』, 学燈社。  
早津恵美子 1991 「所有者主語の使役について」東外大日本語学科年報 13,  
東外大日本語学科研究室。  
宮岡伯人 1988 「エスキモー語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』  
第1巻 東京 三省堂。

- 鷲尾龍一・三原健一 1997 『ヴォイスとアスペクト』 日英語比較選書（中右実編），研究社出版。
- Avrorin, V. A. 1961 *Grammatika nanajnskogo jazyka, t.1.* AN SSSR, Moskva/Leningrad.
- Ikegami, Jiro 1973 Orok Verb-stem-formative Suffixes. *Hoppo Bunka Kenkyu (Bulletin of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures Hokkaido University)*, The Institute of the study of North Eurasian Cultures, Faculty of Letters, Hokkaido University.
- \_\_\_\_\_ 1974 Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*. Berlin, Akademie-Verlag, 271-2.
- Novikova, K. A. 1980 *Očerki dialektov evenskogo jazyka, tom2.* AN SSSR, Moskva-Leningrad.
- Petrova, T. I. 1936 *Ul'chskij dialekt nanajnskogo jazyka*, Gosdarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo, Moskva-Leningrad.
- \_\_\_\_\_ 1960 *Nanajsko-ruskij slovar'*. Gosdarstvennoe izdatel'stvo ministerstva prosveshhenija RSFSR Leningradskoe otdelenie, Leningrad.
- \_\_\_\_\_ 1967 *Jazyk orokov.* AN SSSR, Leningrad.
- Sunik, O. P. 1985 *Ul'chskij jazyk*, AN SSSR, Leningrad.
- Tsumagari, Toshiro 1985 Grammatical outline of Uilta. *Asian and African Linguistics*, ILCAA.
- Zakharov, I. 1879 *Grammatika man'zhurskago jazyka.* Sankt-Peterburg.

## On The "Causative" Forms In Tungus Languages

Shinjiro KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

According to Ikegami (1974), Tungus languages are divided into four groups as follows mainly under the aspect of phonetic correspondences.

- (Group 1) Ewen, Ewenki, Solon, Negidal  
 (Group 2) Udehe, Orochi  
 (Group 3) Uilta(Orok), Nanay, Olcha(Ul'chi)  
 (Group 4) Manchu, Sibe

In this paper I consider especially Uilta and Nanay in detail, and I mention also Olcha, Ewen, Manchu, and Sibe.

As a conclusion, it is indicated that the forms which have been thought only to be "causative" (or, "causative and passive") until now, have other meanings of "reflexive non-intentional use" and "the use of subject non-conversion". And further, I reconsider the meaning of "causative" in Tungus languages, and also in other languages.

"reflexive non-intentional use" in Uilta

- (1) ɲaala-bi kitaan-ʃi goči luk-**pauč**-či-ni. (Ikegami 1997 p.114)  
 hand-Ref needle-Instr. again prick-Ref.Non-intent.-Past-3sg.  
 "A needle pricked my finger."

"the use of subject non-conversion" in Uilta

- (2) ʃee-wi pəlim-**bəe**-či-mi ərkaullee-ni. (Ikegami 1997 p.60)  
 partner-Ref. hurry-BOON-Durative/Iterative-Conv. do slowly-Pres.-3sg.  
 "His partner hurries, but he does it slowly."

"reflexive non-intentional use" in Nanay

(3)əi əsi=mət xaimi tuu-wəən-dii-ni əi, (Kazama 1997 p.95)  
this now=Emp. why fall-Ref.Non-intent.-Pres.-3sg. this  
"Why did I fall?" she (said and) stood up."

"the use of subject non-conversion" in Nanay

(4)ə~ŋ əsi=təni pondəjoo-ji tui um-buwəən-dəə  
now=Topic sister-Ref. in this way say-Sub.Non-conv.-Conv.  
xamasi močo-go-raa undiisi pərgə-xə-ni. (Kazama 1997 p.124)  
backward return-Asp.-Conv. no meaning try-Past-3sg.

"(The elder brother tried to eat the berries which his sisters had gathered, but they were not good, so he wanted to go away. But at that time, the youngest sister said, 'Why don't you try my berries?') Now the youngest sister said so, he went back, and tried."

(5a)amim-bi bur-buwəən-dəə, ñoani əmučkəən balji-i-ni.  
father-Ref. die-"caus."-Conv. he alone live-Pres.-3sg.

"His father died, he lives alone."

(A literal translation as causative would be, "He made/let his own father die and lives alone."  
But this would be incorrect.)

(5b)ami-ni bui-ki-ni. ñoani əmučkəən balji-i-ni.  
father-3sg. die-Past-3sg. he alone live-Pres.-3sg.  
"His father died. He lives alone."

(5c)amim-bi bur-buwəən-ki-ni. ñoani əmučkəən balji-i-ni.  
father-Ref. die-"caus."-Past-3sg.. he alone live-Pres.-3sg.  
"He killed his father/He let his father die. He lives alone."

We can assume some types of situations which are related to the concept "causative".

Situation 1 [Causative]

I made/let him go. [A make/let B Verb.]  
I made/let him eat it. [A make/let B Verb C.]

Situation 2 [Causative/Passive]

I have my hair cut(Someone cut my hair). [A have C Verb-ed.](B Verb C)  
I had my house burgled [A have C(something inalienable to A) Verb-ed.]  
(The burglar burgled my house). (B Verb C(something inalienable to A))

Situation 3 [Passive]

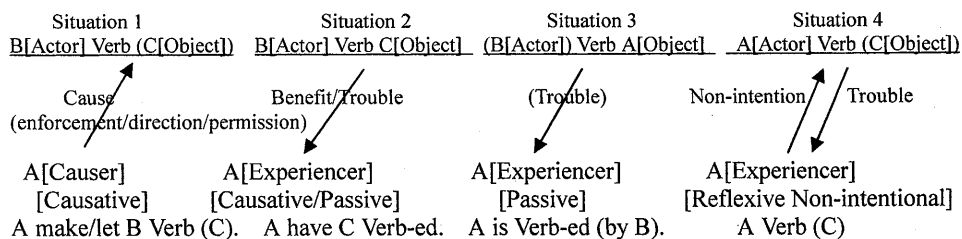
I was hit by him(This sentence implies some "trouble" to the subject). [A be Verb-ed by B.]  
The house is built of brick(No implication of "trouble"). [A be Verb-ed]

Situation 4 [Reflexive Non-intentional]

I dozed off (unintentionally). [A Verb (unintentionally).]  
I pricked my finger with a needle. [A Verb (unintentionally) C(something inalienable to A).]

These situations can be figured as follows.

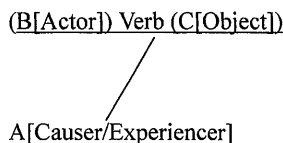
Figure 1



Some languages familiar to us (such as English) seem to have different sentence constructions for each or some of these situations. But such Tungus languages as Uilta and Nanay use only one suffix to express all of these situation-types as we have seen. So the "causative" suffix of these Tungus languages has far wider range of meaning from what has been thought to be causative only. And as we have seen, the "causative" suffix used in the subordinate clause may function only to keep the same subject between clauses if it is syntactically required. In this case the "causative" suffix does not have the meaning of causative, passive, nor reflexive non-intentional.

I think that the essential function of the suffix itself is only to connect A[Causer/Experiencer] with the situation [(B[Actor]) verb (C[Object])] (In the situation 3, C = A, and in the situation 4, B = A). If the figure like above is used, this essential function will be indicated as follows.

Figure 2



And such concrete meanings as causative, passive, reflexive non-intentional, and subject non-conversion will be determined by the following conditions.

- [1] Whether the problematic suffix is used in subordinate clause or not
- [2] The meaning of the verb stem
- [3] The semantic relation between A[Causer/Experiencer], B[Actor], and C[Object], especially whether C is inalienable to A or not